

**（8年間をふりかえって）**

2016年4月に宮崎聖三一教会牧師に任命されて、8年間をふりかえってみる。前任の吉岡司祭の後を受け継ぎ、最初の1年間は広報部の仕事もあった。4月中旬、2度の大地震が熊本を襲った。その関りが教区報の中心テーマのひとつになった。2年目からの3年間は鹿児島に第1日曜の勤務が加わり、延岡と併せて毎月2回の日曜日、宮崎を留守にした。それが終わった5年目には、新型コロナウイルスが全国的に蔓延し、2020年9月からは、礼拝を休止することも何度か起こった。そこで、8月末に「家庭で守る礼拝」を提案し、9月からは毎月、向う1か月の説教などを入れた教会カレンダーを発行。車に乗らない私は、それまでも信徒宅の訪問ができていなかったが、老人施設などはちかくでも面会できない、という状況になった。教会まで遠い距離にある人や、礼拝に出席しても説教の声を聞き取りにくい人もあることを考えると、これは新型コロナウイルスがおさまっても続けるべきだと思って続けてきた。しかし、4月からは定住者がいなくなり、管理牧師の島司祭にその仕事を頼むわけにもいかない。

**（住職ではなく、手紙を送る伝道者として）**

牧師の仕事はなにか、ということで、神学校の学生時代は良寛という僧侶に興味をもち、「住職」という、ただそこに居ることが大変重要な役割と考えていた。ただ、今振り返ると、私が最初に住んだ八幡には長く定住者がいない。最初に牧師になって働いた大牟田は火災のために、久留米と合併して現在大牟田にはない。そして吉岡司祭と入れ替わった私の前任地宗像も、定住者がいなくなって5年になる。今回の異動で、宮崎も私の後に定住者がいない。このような状況で、牧師は「住職」という私の神学校時代に考えた定義は、もはや通用しない。それに代わってこのところの経験から、パウロのことを考えるようになった。彼は復活のキリストに出会って回心してから、3回の伝道旅行をしたが、それと同時に以前彼が建てた教会に、そこを訪問するかわりに手紙を書き送り、それが新約聖書にたくさんの文書として残っている。宮崎の教会が私のあとに住む人がいないと、とても「住職」とは言えないし、今後私自身も小倉に住みながら、もうひとつの戸畑の管理牧師になるということで、このコロナ禍で行ってきたことを今後活かせるのではないかと思う。

**（信徒は何を目指すのか）**

一昨年から1年間、神戸教区の神学塾に信徒神学のテキストとして6回文書を書いたが、その中にクリスチャンとは何者なのか、私なりに学んだり考えたりしたことを書いた。その一部を紹介する。

\*\*\*\*\*

**（2）キリスト教徒はイエスのファン**

遠藤周作という、もう25年以上前に亡くなった作家ですが、この人が「おバカさん」という小説を書きました。その小説のモデルになったカトリックの神父さんで、ジョルジュ・ネランという人がいます。東京大学などで教鞭をとった、優秀な神父さんです。

この人が「おバカさんの自叙伝半分」という本を書きました。この人は日本人に伝道するためには、サラリーマンが集まるスナックでバーテンをしながら聖書を説こうと、東京新宿歌舞伎町にスナックエポペというのを開いて、働いていました。この人も11年前に亡くなったのですが、その人の本の中に、とても面白いキリスト教の説明がありました。

『キリスト教は、キリスト自身の教えたものであるよりも、キリスト自身に関する教えなのだ。キリスト教徒であるのは、キリストの教えに従うというより、生きているキリストと結ばれることなのである。キリスト教は私たちにいろいろな人生観や世界観を運んできた。しかし、キリスト教はそういった思想体系がすなわちキリスト教なのではない。また、キリスト教にはさまざまな規則めいたものがある。しかし、キリスト教はそういう道德体系でもない。キリスト教には、教会という信者どうしのつながりがある。しかし、教会がキリスト教なのではない。教会は、生きているキリストへ導く組織なのだ。キリスト教の核心はあくまでキリスト自身にある。だからこそ、信者はイエスのファンなのである。』  
（『おバカさんの自叙伝半分』より）

ちょっとイメージがわいたでしょうか。簡単に言えば、教会はイエスのファンクラブであり、一人ひとりがイエス様のことを好きで、イエス様に夢中になれるように情報を提供して、キリストへ導く組織だ、というわけです。

### （3）ファンには2段階あるのではないか

ファンという言葉から、私が連想することですが、ファンには2段階あると思います。最初の段階は、好きなスターを追っかけて、その人のことを知りたい、身近に感じたい、という段階でしょう。クリスチャンは、イエス様のファンですから、イエス様のことを知りたくて、聖書を学び、また関連の本を読んだり、イエス様の生活された所へ行きたい、ということで、今はなかなか難しいですが聖地旅行をしたりします。私も5回行きました。しかし、いくら旅行にお金をかけても、これらの行動は未だ、第1段階。

しかし、第2段階があります。ファンというのは、ただスターの追っかけをしているだけでは満足できなくなるのです。それは、あたかも自分がそのスターになったかのように行動することです。カラオケでスターになった気で歌うのはそのよい例でしょう。

この二つの段階について、面白い例を挙げたいのですが、皆さんはイースターの直前の1週間にふたつの行列の行進が行われるのを御存じでしょう。ひとつは、復活前主日に礼拝の最初に行なわれる、イエス様がエルサレム入城の記念として行われるものです。大斎節中の礼拝の式文には、「聖堂の外の適当な場所に集まり、そこから行列を行う。会衆はしゅろの枝を手につく」と書かれています。そして聖歌137番「ユダのわらべのほめしイエスに」を歌うのです。

これは、エルサレムの東にあるオリーブ山のふもとベトファゲという村から山を越えて城壁に囲まれたエルサレムの町まで、イエス様がロバに乗って入られるのを人々が迎える出来事を追体験するものです。本当はしゅろではなく、なつめやしの枝を持って、明るい聖歌を歌いながら行進するのでしょうか。聖都エルサレムについてのビデオなど見ていると、楽しく歩いているのがわかります。

しかし私たちがその礼拝をする時には、しばしば小さなしゅろの十字架を手にするし、その日の福音書は、ロバに乗ってエルサレムに入るイエス様ではなく、その週の金曜日、イエス様が死刑判決を受けて、ポンテオ・ピラトの官邸からゴルゴタの丘へ行進し、十字架に架けられて亡くなるまでの、長い受難物語を読むのです。

そして、実際、その週の金曜日、十字架の道行きと言われる行列が行われます。死刑判決を受けてから、墓に入れられるまでの14の留（ステーション）を回る行進をされた方もあるのではないのでしょうか。イスラエルへ聖地旅行に行くと、ヴィア・ドロローサ（悲しみの道）という場所では、聖金曜日（受苦日）だけでなく、毎日、巡礼者が伝統的なステーションをめぐる行進をします。ステーションというのは、一般には、駅、停留所という訳語が頭に浮かびますが、「人や物が立っている場所」などを意味します。漢字に「留」という字を当てはめているのも、「留まる」という意味があり、イエス様の行動を思いめぐらすため、それぞれのテーマに沿った絵や漢字の文字などが掲げられることがあります。

この、日曜日と金曜日の二つの行列をして歩く行進は、イエス様をめぐる二つのファンの行動を表しているでしょう。日曜日は、ロバに乗ったイエス様の前や後ろになってついて行く。これは典型的な追っかけのファンの行動でしょう。しかし、金曜日の方は追っかけではありません。自分自身が、十字架を背負って歩いて行く、イエス様の気持ちになって、イエス様を演じている、とも言えるのではないのでしょうか。

#### （４）肝腎なのは「靈性」

「キリスト教徒はイエスのファン」と言った、ネラン神父は、その本の中で大切なことを語っていました。イエスのファンになるのに肝腎なことは「靈性」だと言います。

『肝腎なのは「靈性」と呼ばれるものだ。この奇妙なことばは、Spiritualityの訳語である。その意味はこうだ。聖書の中にはキリストのさまざまな姿が見られるが、そのうちの一つを選びとり、そのキリスト像に従って自己の信仰を实践することである。』

（『おバカさんの自叙伝半分』より）

私は若いころから「靈性」という言葉に魅力を感じていました。しかし「靈」という言葉は、「風」とか「息」という意味もあって、目に見えない、つかみどころのないものと思っていました。ところが、このネラン神父の説明の、非常に具体的な表現に出会ってから、ハッキリとした道が示されたように思えたのです。

宮崎の教会では、聖餐式でパンとぶどう酒をいただいた後、座ったままで短い聖歌を歌っています。聖歌集の556番から580番から選んで2回繰り返しています。その中で特に印象に残っているのは、563番。

『わたしはなりたい キリストを生きる人に  
わたしはなりたい キリストを生きる人』

ネラン神父が肝腎な事として紹介している「靈性」をそのまま歌にしたようで、キリストの肉と血を意味する聖餐を受けるたびに、自分がキリストに似た者になれるように、自分に言い聞かせ、またそれを受けることで励まされているようにも思えるのです。

ここで、私が印象に残っている文語聖書の言葉を紹介します。

『汝らキリスト・イエスの心を心とせよ』ピリピ人への書2章5節

口語や最近の二つの共同訳聖書を見ても、この聖句を超えたインパクトがありません。

\*\*\*\*\*

最後に、「家庭で守る礼拝」についての文章の一部を書き出します。

#### （家庭で守る礼拝を提案する経緯）

教会での礼拝では、聖書朗読や説教を聞くことは、大切な要素ですが、礼拝は神様から受けるだけではないのです。反対に私たちの方から神様に向かって、応答することも大切なのです。

聖書のはじめ、『主なる神は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。』（創世記2：7）と書かれています。

神様からの息を私たちの体に受けているだけでは、死んでしまいます。身体に取り入れた息を、今度は吐き出すことで、呼吸は成立し、私たちは本当の意味で生きたものになるのです。その象徴が、私たちの行なう礼拝だということを、覚えておきましょう。

教会では、聖書朗読や説教を聞くほかに、私たちの方から、神様を賛美する歌を歌ったり、詩編を唱えたり、神様にお願いする祈りをささげたりしているでしょう。聖餐式も、ただ私たちがパンとぶどう酒をいただくのではありません。献金と一緒に、私たちの労働の実りの象徴として、パンとぶどう酒を献げている、という面もあります。

教会の礼拝堂で礼拝できない時も、この人間の本来の生き方を具体的に実行するために、各家庭で、唯聖書や説教を読むだけでなく、神様への応答をすることも含んだ礼拝を推奨したいのです。

#### （「家庭で守る礼拝」を提案する理由）

祈祷書の一番最初の礼拝式文「朝夕の礼拝」の冒頭のルブリック（小さな字で書かれた解説）には、「毎日聖書を朗読し、詩編を歌って神をほめたたえ、祈りを献げて日々の生活を神と人とのために清めることは、初代教会からの営みであった。わたしたちも「朝の礼拝」「夕の礼拝」によってこの営みに加わるのである。」と書かれています。聖職だけでなく、信徒も毎日、この祈祷書を使っての信仰生活をするのが聖公会の伝統でした。

しかし、私たちの生活のスピードが速くなり、また日曜日の長い礼拝には参加がむずかしいために、イギリスでは朝夕の礼拝よりも前に「A Service of the Word」（み言葉の礼拝）という形が最近登場してきました。そのあたりの事情をよく説明している、アイルランド聖公会の説明文を引用します。

『教会の中には、従来の決められた朝の礼拝とか夕の礼拝、あるいは聖餐式では、特定の会衆の必要を満たすことができない場合がある、ということが広く認められています。「家族の礼拝」とか「すべての世代のための礼拝」、またキリスト教にあまり関わりがない友人を招く人々の、「伝道的な礼拝」など様々な形式ばらない礼拝のかたちの実験がこれまであったからです。このみ言葉の礼拝の基本的な構造は、そのようなすべての礼拝のことを念頭に置いているのです。』

このような事情は、各教会に集まって礼拝できない、現在のわたしたちも参考にできるものと考え、「家庭で守る礼拝」という形を作ってみました。